

# 派遣先で感じた最大のカルチャーショック

雪で迎えた節分の日からまだまだ厳しい寒さが続いています、、、

同時に、春が近づいている証拠でもありますね。

今月の R2 のテーマは「派遣先で感じた最大のカルチャーショック」です。

これから派遣先において、いろんな価値観の違いに遭遇するでしょう。

海外で生活するという事は、もちろん、全く別の文化の中で生活するという事ですから、

それは、カルチャーショックは当たり前のことです。

感動のショック、驚きのショック、さまざまなカルチャーショックがあると思いますが、

それらも文化の一つであること、決して拒否せず受け止めてから考えてみるのも大事だと思います。

今回、バックナンバーの ROTEX の声も載せてみたので、参考にして下さい。

また、今月の特集は部活動についてです。派遣先での放課後の時間の過ごし方をのぞいてみましょう。

うたがわ かおり

宇多川 薫 【2002 年度アメリカ派遣】



速い、読めない、分からない。

派遣先の学校で一番初めに驚いたのは、先生の板書の速さだった。ノートをきれいに書こうと試みた自分なんてすぐに忘れるくらい、ただ黒板に並べられたアルファベットを目で、シャーペンで、追いかけることに必死でした。それに、先生によっては黒板の字の解読が難しい時もありました。でも、いちいち「あれは何て読むんだろう…」と考えていると、あっという間に次の話に言ってしまうので、ただ見たままを書いていた記憶があります。

そこで私が出た行動は、聞く、ということです。それまでは、先生の話も文字もスピードに乗って流れていっていましたが、先生の話聞いて、大事だなんて思うところを自分なりにメモを取って授業に集中するように工夫しました。初めの頃のノートに比べると読めるものになったと思います。このことが出来るまでに、時間が掛かりました。少なくとも学校というものに慣れるまで、移動教室の人も時間も先生の言葉も字も速くて付いていくのが大変でした。慣れてしまえば、解読が難しかった先生の字も抵抗が無く読み取ることが出来ました。

慣れない環境に、知らない人だらけの中に一人放り出されて始める留学生活ですが、必ず自分のペースで動ける時が来ます。目が回るくらい余裕が持てなくなることもあるけれど、乗り越えた先ではそれが自分のものになっているはずだから、慣れるまでの時間ぐっと耐えてみて下さい。何かあった時は ROTEX がいつでも相談に乗ります！

いしわたり まさひろ

石渡 雅大 【2003 年度ロシア派遣】

日本での当たり前は通じない。

僕が受けたカルチャーショックの中で、是非学生のみみんなに知っておいてもらいたいことは、日本で普通だと思っている「質」に対する価値観が違ったりすることです。日本はとも豊かな国なので、他の国に行った場合質の悪さに目がいきがちです。日本ではこんなことあり得ないのに、なまってそんな感覚にとらわれることがあるかもしれません。



私が受けたカルチャーショックは、水道の水です。水道水の何にびっくりしたかという「色」です。出す度に色が変わります。最初は赤く、だんだん白くなっていき、透明になりました。これは水道管によってこの様な色になるのだそうです。でも、安心して下さい。この水はお風呂の時に使い、飲み水は、飲料水を別途買って使うので健康には影響ありません。

町自体のインフラ設備の整っていない状況というのは各国あると思います。このカルチャーショックに対しては、腹をくくって、現地の人になる気持ちでぶつかって行ってほしいですね。

あきやま がく

穂山 学 【2003 年度オーストラリア派遣】

笑顔でポジティブからアクティブへ



僕が感じた日本と西洋との文化の違い、そしてそれが原因で留学時代に一番苦労したことは、人々の積極性と人々が対人関係を良好に保つために常に意識していることである。

日本人は西洋人に対して、陽気な明るい人々というポジティブな印象を持っていると思うが、僕は彼らが常に笑顔でいるからだと思う。彼らはこの「笑顔」をととても大切にしている。彼らは写真を撮るときに必ず笑顔を作る。子供の時から写真を撮るときは笑顔を作ることを教えられているし、歯並びを矯正することは常識になっている。この「笑顔」のおかげで私たち日本人は西洋人へのイメージをある程度作っていると思う。彼らが常に笑顔を大切に理由は、相手に自分のイメージをよく持ってもらうためだろう。今まで学校でもどこでも日々生活していて、人によく好かれる人がいると思うが、そういう人に共通することは彼らが常に笑顔でいることである。また逆のパターンではやはり、彼らは笑顔でいることは少ない。相手にイメージ良く思ってもらえるということは、社会で生きる上でものすごく得なことであるということに僕は最近気づいた。このことを西洋人は当然のように理解しているのだ。

また西洋人はとても積極的である。そして消極的な人というのは良しとされない。積極的であるということはこれも生きるうえで得なことであり、また消極的といのは損なことである。皆さんが留学をすると必ず大きな財産を得る。これは皆さんがひとりで海外で暮らしてみようという積極的な気持ちが留学へと導いた結果である。積極的な人は得るものが多い。日本人である以上こういった意識で生活するのはなかなか難しいかもしれない。ですがこうした意識をもって生活すればきっと良い一年になると思います。僕は実はこれらのことができなかった。性格上積極的になれなかった。

だから最近は常に意識はしている。それが得であるということ留学の一年で学んだからだ。



## アメリカ＝行動手段車だけ？

私も派遣先のアメリカ合衆国で、日本とは違う点を多く見つけました。「日本と同じ点は何？」と聞かれたら、「えーっと…」となってしまうのが事実です。そのなかでも今回は「アメリカ車社会」について書きたいと思います。

皆さんもご存知の通り、アメリカ合衆国では車は不可欠です。特に私の派遣先の町、Marionには電車はおろか、バスやタクシーすらありません。町にモールなんてありませんし、自分はかなりの方向音痴。どこかに出かけるときは誰かに車で一緒に連れていってもらうしかありません。最初の頃は買い物や、お出かけの機会はHFが違う町へ出かける時ぐらいでした。かわって藤沢はあらゆる交通機関が整っていますし、町も栄えている。そんな暮らしの中にいた私にとって、この「車無しには出かけられない」というショックは大きいものでした。

しかし考えてみればそんなことは無いのです。自分の足を使えば良いのです。確かにモールまでは行けないけれど、スーパーやガソリンスタンドくらいまでなら歩いて行けないことはない。アメリカ車社会に慣れてしまっていたのでしょ。当たり前のことですが、その気づきは自分にとって小さいものではありませんでした。そのことに気づいてから、変な話ですが「自由」な時間を楽しめるようになりました。更に自分の足で歩くことで、アメリカの町、人間、自然に触れる機会が増えました。町の人と話す機会もたくさんありました。空が広い、自然が豊かだと感動しました。

「郷に入れば郷に従え」という諺もありますが、逆に文化が堅い殻になってしまってもったいないと思います。意外にその殻を破ってしまうことで、新しい発見があったりするのかもしれない。



## やさしさの表し方

私はフランス留学の中で家族の在り方の違いに驚きました。

もともと私の家族では誕生日やクリスマスなどケーキは食べるものの、さほど盛大に祝う習慣はありませんでした。また中学に入ってから反抗期(?)というものもあって、友達とばかりつるんで家族とはあまり出かけなくなったり、食事の時間も家族との会話よりもテレビ番組を優先したり、家族と過ごす時間が年齢があがるごとに少なくなってきていました。このような傾向は周りの友達の中でも珍しくなく、そのことに対して気を留めることはあまりありませんでした。

そんななか留学中、私がお世話になったホストファミリーはどこの家も本当に家族の仲がよく、親戚同士でよく集まって食事会をしたり、休日は必ず家族で出かけたり、ピクニックに出かけたり、誕生日など行事の際には前もって計画して大掛かりなパーティーを開いたり・・・本当に家族同士の絆が深かったように思います。それに対して学校の友達の中には両親が離婚している家庭も多くあり、2つの家庭を行き来している子もいたりしました。

そして自分が、日本の家族にしていた態度は何か違っていたのではないかと、また本当の家族の在り方とはどうあるべきなのか…と考えるようになりました。

留学したことで日本の家族に支えられているということを実感することもあり、また日本人の言葉に表さないやさしさや心に気付かされました。またフランス人のように家族を想い、それを常に言葉や態度に表す大切さも実感しました。このことがきっかけでフランスと日本のお国柄が明らかになったし、それぞれの文化をより理解することにもつながりました。

バックナンバーより「あなたが経験したカルチャーショックについて」(vol. 3 Jun, 2005)

## 稲葉大 ブラジル派遣

### 常識と価値観への痛烈な衝撃

ブラジルでは家政婦を雇うことはそう珍しいことではない。彼女達は「インプレガーダ」と呼ばれる。

私の第1ホストファミリーの家にも1人のインプレガーダがいた。1週間のほとんどを、雇い主であるホストファミリーの家に寝泊りし、炊事、選択、掃除など家事のほとんどを1人で担う。年の頃は60前半、背は低いが恰幅がよく、肌は深い褐色。彼女の名前はテレザだった。ある晩、今のテーブルでテレザとホストマザーが方を並べて何かを隠していた。ホストマザーが「ヒロシ、見てごらんないさい。どう、きれいに書けたでしょう?」と言い、テレザの手元にあったノートを私に向けて見せた。そこにはぎこちない字で大きく「TERESA TERESA…」と繰り返し書かれていた。私はその時はじめて、テレザが文盲であることを知った。

私がブラジルに渡った当時の非識字率は約16%。そしてインプレガーダは貧しい家族に育った人々である場合が比較的多い。テレザのノートを私がじっと見ていると、彼女は顔をくしゃくしゃにしてテレ笑ったが、しかしどこか誇らしげだった。私がそこで覚えたのは悲しみや哀れみ、蔑みではなく、自らの上引きと価値観への痛烈な衝撃だった。

「派遣先で感じた最大のカルチャーショック」(vol. 7 Mar, 2007)

## 安藤真菜 韓国派遣

今回のR2の依頼内容を見たとき、私にはカルチャーショックだと感じたものがあったか、とても悩んでしまいました。それくらい日本と勤億では似たものも多く、パッと思いつくものが無いくらいなのです。しかし、よく考えてみれば『これがカルチャーショックだったのかな?』というものがありました。

まず、学校生活で感じたこと。日本の学校では教師が生徒に手をあげるなんてことをしたら、保護者に何を言われるかわからない、といったような考えですよね。でも、韓国では違うのです。学校で生徒が悪いことをしたり、テストの点が悪かったりすると、先生は手を使って叱ります。しかし、それはみなさんが勤が会えるような『体罰』とは違います。生徒の親によっては、子供が悪いのだから先生に叱られて当然、そこまでしてくれる先生に感謝をするといった感じが見られました。

そして、普段の生活で感じたこと。それは、家族の中では父親が一番だということです。もともと私の家族では父親が一番偉い打とか、そういった考えが全くなかったので、韓国でホームステイした過程や友人の家でも驚きました。『お父さんが食べるまで待ってね』とか、『お父さんが帰ってきたら・・・』という様なことがあり、どこか昔の日本に似ているのかもしれませんが。

本当はもっとたくさんあったと思いますが、それほど違和感があったものは少なかったのだと思います。なので、韓国にいて外国にいるという感覚よりも、昔の日本にいるという感じが強かったです。

## 小ネタ特集

学校生活、、先月の特集では、部活から友達作りのきっかけを作ったっていう声が多かったなあ。でも、どんな部活があるんだろう?国によって違うのかな?



# 部活何してましたか?

## 【アメリカ】

- ・バレーボール部、陸上部、インターアクトクラブ、新聞クラブ
  - ・言葉に自信がなくあんまり参加をしていなかったのですが、インターアクトとアジアアメリカンクラブに入りました。実際、スポーツ系のほうがよかったかと後悔しましたが、家に帰ってホストファミリーと過ごす時間も大切だったのでよかったとも言えます。
  - ・冬はバスケットボール、春はテニス。部活を通じて友達もできたので、良かったと思います。
  - ・スピーチ・デベート、陸上、水泳、ボーイスカウト
  - ・サッカー、スキー、陸上、pepclub（いろんな部活の試合を盛り上げるためにポスターを作ったり、主にお菓子を食べていました）、interact、その他 drama（演劇のクラス）の大道具系のボランティア
- ・インターアクトクラブに参加しました。日本でも活動していたので、他の学校の同じ部で活動することは大変興味深かったです。地域奉仕活動（高速道路の清掃活動、小学校との交流活動、貧しい人々への家を建てる活動等）はとてまたのしかったです。
- ・バスケットボールクラブに入っていました。そこでチームメイトとも仲良くなりました。本場のアメリカでバスケットが出来て本当に楽しかったです。みんなで活動費を稼ぐために朝からカーウォッシュをしたりしました。練習のことなど悩んだり、いろいろ大変でしたが、たくさんの経験が出来て本当にやってよかったと思いました。他には rera for life などボランティア的なことにも参加していました。

## 【オーストラリア】

- ・吹奏楽部とオーケストラ。
  - ・オーケストラは何回か出席しましたが楽器の数が足りなかったためほとんど参加できませんでした。吹奏楽部では自分の楽器を使用していたので、毎週参加してました。
- 私はオーケストラ部に所属しました。日本でバイオリンを習っていたので、授業で音楽を専攻したらそのまま流れでいれられました。教会で演奏しました。私は留学生だったためいけませんでした。アメリカで開催されるコンクールに参加するなど、音楽に力を入れた高校でした。

## 【カナダ】

- ・吹奏楽部とストリングアンサンブルに入りました。
- ・中学校からブラバンでトロンボーンを吹いていたのでコンサートバンドに参加してトロンボーンを吹いていました。

## 【韓国】

- ・私の学校では日本のような部活はなかった。週に一時間だけクラブの時間があり（これは全員やる）、仲の良い友達とバトミントクラブに入った。でもバトミントをする時間より、しゃべって、お菓子を食べている時間のほうが長かった。他には映画を見たり、合唱したり、校内新聞を作ったり、英語や数学を勉強したりするクラブがあった。
- ・韓国の伝統楽器（サムルノリ）の部活に入っていました。

## 【台湾】

- ・クラブ活動は、授業の一環としてあったので、参加していました。
- ついでに、私は料理クラブに所属していました。

## 【スウェーデン】

- ・部活動のようなものは特にありませんでした。  
あるとしたら、街のアイスホッケーやサッカー・ハンドボールのチームがあったと思います。  
クラブではないですが、学校の授業以外で音楽（歌や楽器）を習うことが出来る音楽スクールがあり、私はサクソスのレッスンをとっていました。

## 【フランス】

- ・バレーボールのクラブに入っていました。

## 【ブラジル】

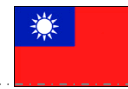
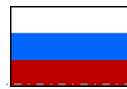
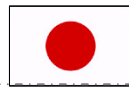
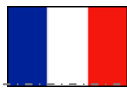
- ・基本的にブラジルの学校には部活のようなものはごくまれです。  
活動をした場合、外にあるクラブなどに入るといった感じになります。

## 【ロシア】

- ・ロシアの学校は基本的にクラブ活動がなく、少なくとも僕の学校ではそのような活動には参加しませんでした。



なるほど、国や学校によって部活がないところもあるんですね。放課後の時間の過ごし方は部活動以外にも自分で工夫できるのかも。貴重な時間を大切にしよう。



R<sup>2</sup>は当 2780 地区多くのローテックスの方々、  
ガバナー事務所の協力を基に発行されています。  
多大なる尽力に感謝いたします。

R<sup>2</sup>編集長： 宇多川薫（2002 年度アメリカ合衆国）